若年発症した痛風関節炎患者の臨床的特徴

田中 郁子¹⁾ 加藤 隆司²⁾ 甲斐 基一³⁾
小川 邦和³⁾ 山田 貴史⁴⁾ 玉置 繁憲¹⁾

背景と目的

痛風関節炎の初回発作は30歳台に最も多く認められるが、20歳台さらには10歳台の初回発作もまれではない。男性の肥満割合は10歳台で約10%、20歳台で約25%であり、依然増加傾向があり今後20歳台以下の若年発症の痛風関節炎患者の増加が予測される。そこで、当院を受診した若年発症痛風関節炎患者の臨床的特徴を検討した。

対 象

当院を受診した男性痛風関節炎患者940名を対象として検討した。

結 果

初回発作の年代は20歳台以下14% (10歳台2%を含む)、30歳台30%、40歳台30%、50歳台13%、60歳以上12%だった。現在の年齢はそれぞれ 34.6 ± 9.4 歳、 41.1 ± 7.1 歳、 48.4 ± 5.9 歳、 55.9 ± 5.1 歳、 67.6 ± 6.2 歳だった。BMIは20歳台以下 26.8 ± 4.6 、30歳台 25.9 ± 3.9 、40歳台 25.4 ± 2.9 、50歳台 24.2 ± 3.0 、60歳以上 24.1 ± 3.8 と年代が上がるに従い低下し、20歳台以下で最も有意にBMIが高値であった。次いで、20歳台以下と30歳台で臨床的特徴を比較検討した。尿酸降下療法の既往は20歳台以下で11%、30歳台で12%だった。尿酸降下療法を受けていない患者の血清尿酸値はそれぞれ 8.2 ± 2.2 mg/dL、 7.8 ± 1.6 mg/dLと20歳台以下で高い傾向はあったが有意差は認めなかつ

た($p=0.064$)。血圧、血清ALT値、HbA1c、TG、LDL、HDLは全く差が無かったが、 γ -GTPは30歳台で有意に高値であった。常習飲酒者も30歳台で多く、一方喫煙率は差がなかった。身長体重で補正した補正eGFRの年齢に伴う低下は20歳台以下では0.92/歳と30歳台の0.63/歳に比べて大きかった。

結 語

20歳台以下の若年発症痛風関節炎患者は14%で、他の年代に比べてBMIが高値であった。若年発症痛風関節炎患者では腎機能低下がより早く進行する可能性が考えられた。

1) 医療法人IRO名古屋膠原病リウマチ痛風クリニック
2) 国立長寿医療研究センター放射線診療部
3) 医療法人IRO三重膠原病リウマチ痛風クリニック
4) 中部大学応用生物学部

Shigenori Tamaoki, Ikuko Tanaka
Takashi Kato
Motokazu Kai, Kunikazu Ogawa
Takashi Yamada